
ある日の夕方に。

古河晴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の夕方に。

【Nコード】

N4512U

【作者名】

古河晴香

【あらすじ】

ある日の夕方に、はるかには電車の中でうとうとし始めました。終点になって目を開けると、電車に乗っているのは一人きりで、砂漠の真ん中の見知らぬ駅にたどりついていました。線路に沿って歩いて元の世界に戻ることにしました。童話風の小品です。「心の旅」という感じです。（他HPで公開中の作品です）

日没

ある日の夕方のことです。はるかは電車の中でうとうとし始めました。

ビルとビルの切れ目から、オレンジ色の夕日がときおり顔を出すがまぶしくて、

はるかは目をつぶっていたのです。

そうして、目の裏にオレンジの光と、ビルの影との点滅を感じているうちに、

自分が起きているのか眠っているのか分からなくなってきたのです。

さみしい夕方でした。

いくつ駅を過ぎたか分かりません。周りの人が入れ替わっていつて、

ふと目を開けると、誰もいなくなっていました。

終点まで行けばよかったので何とも思わず、

はるかは再び目をつぶって、電車のガタンゴトンという揺れを感じていました。

するとだんだん砂漠のようなにおいがするなあと思えて来ました。砂漠なんて行ったことはないのですが。

太陽の光のにおい。乾いた空気のおいです。

たぶん夕日に照らされて、電車の中がカラカラに乾燥しているのです。

そう思っていたとき、電車がゆっくりになって、とても静かに止まりました。

目を開けると、終点のようなのですが、駅に見覚えはありません。乗る電車をまちがえたとも思えないので不思議に思いながら、ドアの外へ出たとたん、頭の芯がきゅっと冷たくなりました。砂漠が目に入ったのです。

そこは不思議な駅でした。人は誰もいません。

ただ砂の上に、プラットホームと、トタン屋根がついているだけなのです。

そこには、はるか以外誰もいませんでした。

改札も無ければ、ホームも一つきりで、上り電車の線路もありませんでした。

どうしようかと考えて、運転手さんに聞こうと思って、電車の前の方の運転席をのぞいてみましたが、

もう仕事を終えて帰ってしまったのか（それとも初めからいなかったのか）

誰もいませんでした。

どうやってうちに帰りましょう。困ったなと思いました。

でも、それほど不安にはなりませんでした。

線路のレールを逆にたどって行って引き返せばよいのだとわかっていましたから。

はるかにはプラットホームの端から砂の上に飛び降りました。

少し涙が出そうになりましたが、気を強くもって、

どこまで行ったら前の駅が見えるのか予測もつかなかったけれどとにかく歩き始めました。

オレンジ色の夕日はいつのまにか白っぽい昼間の太陽になっていて、

空は薄青くなっていたのですが、あんまりまぶしいので足元を見ながら歩いていて、

はるかはそれには気づきませんでした。

はるかには日の光で熱くなったレールのわきを歩きました。

歩きました。歩きました。くつに砂が入りました。

足は一步一步砂にうまりそうでした。

でもレールの上にあがって歩くと、

なんだか後ろから（それとも前から？）電車にひかれそうで怖かったので、

レールのわきを歩きました。

歩いて歩いて歩きました。景色はちつとも変わりませんでした。

後ろを振り返ると、もやもやした空気の向こうに

あの駅が恐ろしげに見えました。はるかは歩き出してよかったと思いました。

きつとあそこはいてはいけない所だったのです。

12時

はるかには線路のわきを延々と歩いていました。

砂の上は歩きづらいいし、その上スニーカーのかかとかから砂が入ります。

はるかはまるで広い広い砂漠に行く一匹の蟻んこになったような気分でした。

歩いてても歩いてても先が見えません。

広い空と広い砂漠にはさまれて、はるかはかわいそうなくらいちっぽけでした。

日はいつまでも真上にあるので方角がわかりません。

線路は曲がったりせずまっすぐ、どこまでもまっすぐ続いていました。

はるかはどのくらい歩いたのか全然分かりません。

でも後ろを振り返るとあの恐ろしい駅が

もう地平線の向こうに消えてしまったのが救いでした。

でも、いつ後ろからあの列車が来るとも限らないので、

はるかは少しおびえながら歩いて行きました。

はるかには不思議と、あまり疲れを感じません。おなかも空きません。

ただただ足を前へ前へ、右左と交互に出して、先へ先へと進んで行きました。

そうしていてどのくらいだったのでしょうか？

空には雲一つ無く、見渡す限り線路と砂しか見えず、太陽もいつまでもまぶしく真上から照らしているのはるかは疲れてきてしまいました。足はまだ動くのですが、悲しくなってきたあまり前へ進みたくなくなってきたのです。

はるかは足をゆるめました。

風も全く無く、光に満ちた静かな空気があるばかりです。

あてもなくて、ぐるりと一回転してみますが何も手掛かりはありません。

はるかはため息をついて、とうとう立ち止まってしまいました。

はるかは次の一步を踏み出す気力が無くなっていました。

なぜなら、時間が本当にちゃんと進んでいるのかもわからなかったからです。

歩いてても無駄なんじゃないだろうか、とはるかは思いました。

はるかはしばらくそうやって立ち止まっていました。

そうしていると、この世界には全く動くものはありません。

気づいてみると、この世界は水平なものばかりで、

はるかだけが地面に打ちつけられた目印の棒くいのようでした。

はるかはふと思いつきました。

自分は今までこのレールの左側を歩いてきたけれど、右側を歩いてみようか。

それには線路を横切らなければなりません。

それでも、それだけの価値があることのように思えます。

たったそれだけのことですが、ずっと変わらず左側を歩き続けてきたので、

その思いつきはなんだかすてきなことに思えました。

はるかには前のほうをようく見ました。それから後ろのほうも目をこらしてじつと見ました。

電車は来ないようです。耳をすましても何も聞こえません。

でも、自分がわたっている最中に猛スピードで電車がやってきて轢かれはしないかという不安はありました。

そこで、はるかは自分がわたっている間に電車がやってきて轢かれるのをイメージしました。

でもこれだけ見通しがよいので、もしそんなことがあるとしたら、地平線の向こうからここまで、この世の物では無いほどのスピードで

列車がやってこなければなりません。

はるかは渡る決心をしました。

はるかはもう一度左右を見てから耳をすませました。それから息をとめて、

枕木に右足をかけてから一気に走り出しました。

鉄のレールをまたいでじやりの上を走り、またレールをまたいで、それから向こう側へ飛び降りました。

渡るのに成功したのです。

その瞬間、ドオツと背後で地面が鳴り響いて体がビリビリビリッと震えました。

立っているのがやっとなほどのものすごく強い風が吹いて、そしてキーンと痛く耳鳴りがしました。はるかはどっと冷や汗をかいて、胸に手をやりました。

とてもドキドキしていたのです。

後ろを振り返ると、レールは知らん顔してあいかわらずそこにあります。

レールの先は地平線へと消えていて、もう一方の端も地平線の向こうに消えていました。

電車の姿は見えませんでした。どうやらはるかが線路を横切って渡り終えた直後に、

はるかの後をこの世の物では無いほどのスピードで電車が通過して行ったようです。

でもそんなことはどうでもよいのです。はるかは横切ることに成功したのですから。

はるかは満足しながら、今度はレールを左手に歩き出しました。

そして歩き始めました。そして、どんどん歩きました。

ふと思いついて太陽を見上げると、

レールのこちら側へ来た分だけ太陽が向こうへ行っただような気がしました。

1時

はるかが歩いていると、どこかで金属が触れ合うような音がしました。

空の隅っこでそんな音がしたようでした。

今度は空の別のところ、頭の後ろのほうで、

ガラスの中の氷がカランと転がったような音がしました。

はるかは振り返って、空の青が薄くなっている辺りを見通すようにしましたが、何も見えません。

はるかはまた歩きだしました。

しばらくすると、今度はもっとはっきりと、はるか右の方の乾いた空気の中で、

山のわき水の流れのような美しい音が聞こえました。はるかがはっとそちらを見ると、

砂漠と空の間を何かキラツキラツと光を反射させながら飛んで来るのが分かりました。

はるかが歩きながらそれを目で追っていると、それはこちらへは飛んで来なくて、

線路が地平線に消えるあたりに斜めに飛んで行きました。

その音はただの音ではなくて、旋律をもっていました。

今度は後ろから、ガラスのように透き通った美しい音が聞こえて、それが高くなり低くなり旋律を奏でながらだんだん近づいて来ると、

はるかを追い抜いて行きました。それは銀色と水色が混ざった色の羽をもった、美しい小鳥でした。

それは線路の先へと飛んで行きました。

この先に何かがあるのだろう、とはるかはわくわくして急ぎ足になりました。

どれくらい歩いたでしょうか、何匹も小鳥が同じように線路の先へ向かって飛んで行きました。

そしてはるかが進むにつれて、何かウーンという響きが大きくなっていきました。

そしてとうとう線路の真ん中に、とても立派な、背の高いヒマラヤ杉が立っているのを発見しました。

それは砂漠の真ん中でとても瑞々しく鮮やかな深い緑で、はるかは思わず目を見張りました。

そのヒマラヤ杉に小鳥は飛んで来ては枝に止まって、美しくさえずっていました。

小鳥は何十匹として、輪唱しているようにワンワンと共鳴していました。

銀の鈴を何百個もいっぺんに鳴らしているようでした。

はるかはぼうぜんとして立ちすくんでしまいました。すごく質量のあるハーモニーです。

そのヒマラヤ杉全体が銀色に光っているようでした。

その合唱は光の柱になって天まで届くようでした。

はるかはそこに立ちすくんでいました。

小鳥は次から次へと歌いながら集まって来ては、そのまま輪唱に加わりました。

どの小鳥もある長い同じ歌を歌っているようでした。

ある小鳥が歌った旋律を、少し遅れて別の小鳥が歌っていたりしたのでそう気づいたのです。

ふとはるかは、小鳥がどんどん集まっているのに木の枝からあふれないのを不思議に思いました。

そこで一匹に注目していると、その小鳥は長々と一つの歌を歌って行って、

うれしそうに高らかに歌い終わると、くにやりと形が変形して、枝にひっかかったハンカチのようになっただかと思うと、

とろりとちぎれてぼとりぼとりと砂の上に落ち、

少しするとそれがじゅわっと砂にしみこんで行きました。

よく見てみると、あちらこちらで歌い終わった小鳥が水のしずくとなって

枝から垂れて砂にしみこんでいっています。

小鳥たちが水になるのか、もともと水が小鳥になったのかは分かりませんが、

その水の小鳥たちがこの砂漠の真ん中でヒマラヤ杉を生かしているのです。

はるかはヒマラヤ杉の木陰に腰を下ろして、美しい輪唱を聞きました。

それは居心地が良くてとても安らぎました。はるかの体もとろけてしまいそうでした。

そうしてしばらくそこに座っていたのですが、偶然はるかの肩に小鳥が落ちて来たのです。

はるかはいそいで立ち上がりましたが、はるかの肩で小鳥は水になって、

服にしみこんでしまいました。

大切な生命の水を無駄にしてしまったのが申しわけなくて、はずかしくなつて

はるかにはマラヤ杉の木陰から外へ出ることにしました。

そしてそこで強い日の光を浴びながら、その大きな木を見つめて音楽を聞いていました。

そして次第にハミングで、そのメロディーをなぞってみることを始めました。

その曲はこの世の物では無いほど美しかったです。

その曲は小川の流れのように瑞々しく清らかで、豊かな喜びに満ちあふれていました。

はるかはそのメロディーをまねようとしていました。

でも、ある小鳥の声をまねようとしても、

かぶさるように別の小鳥の印象的なフレーズが割り込んできたりして、

どんなメロディーなのかなかなかつかめません。

でも、その巨大なハーモニーに包まれて、はるかの体の中の水や、吸う空気にその響きが溶け込んでいたので、

判らないなりにハミングしていると、自分も一つに溶け込んだような気分になりました。

すると、小鳥が木に飛んで来ては別の小鳥が溶け、ということを繰り返している中で、

ある飛んで来た一羽がはるかの肩に止まりました。

そしてそのまま肩で歌い続けています。

その小鳥はヒマラヤ杉の木陰ではなく、はるかの頭でできた日陰に止まったのです。

はるかには懸命にそのメロディーの流れを追いました。高いところで星がまたたくようにさえぎったかと思うと、ふいに急降下してきて静かで優しい地下水の流れになったりしました。

春になって泉の氷にひびが入るときのようなスタッカート、それから心の琴線に触れるような慈愛に満ちた軌跡。

それらは予想もつかない流れで、繰り返しも無かったので、はるかはいつしかメロディーを覚えようとするのはやめて、うっとり聞きほれていました。

すると最後に、長く長く息の続く限り美しい中音域で伸ばした後、その小鳥は誇らしげに羽根を広げてはるこの肩にくずれました。はるかは思わずそれを助けようと手を出しました。

すると小鳥は手のひらへ滑ってきたので、はるかは両手をお椀のようにしてこぼれないようにしました。小鳥はみるみるうちに流れやすくなっていった、

しまいには指のすきまからしずくがぼとりぼとりとこぼれました。

はるかはふと、のどが渴いていることに気がつきました。

はるかはその透き通ったきれいな水に口をつけると、ごくごくこくと飲みました。

その水は少し甘くて、やわらかくのどにしみこんでいきました。

はるかはその水を飲み干して、ああ、ありがたいなあ、と思いました。

あいかわらずはるかの肌をびりびりと震わすようなものすごいさえずりが響いていました。

この木も私も、この小鳥の水に生かされているんだなあ、生かしてもらっているのだなあ、とはるかは思いました。

はるかがそうやっていると、少し音楽が小さくなったように思い

ました。

飛んでくる小鳥が少なくなったのです。

どどんハーモニーから抜けて、小鳥が水になっていきます。

小鳥が少なくなるにつれて、はるこはその木の枝に、

まるでクリスマスツリーの赤い玉飾りのようなものがついているのを発見しました。

ヒマラヤ杉はあんな実はつけないだろうとは思いましたが、でもそれはヒマラヤ杉の実のように思えました。

小鳥はどんどん減って行って、とうとう最後の一匹になりました。その小鳥は透明なガラス玉を転がすようにさえずりました。

リルリルルルル、ラルリルラララ、クルンカラーン、

カルンキルーン、コローン、コローン、コローーーーー

ー……ン。

そして泣きやむと、小鳥はバランスを崩してくずおれそうになりながら、

力を振り絞ってはばたくと、くちばしにさつと赤い実をくわえて空へ飛び立ちました。

そして懸命に地平線に向かってはばたいて行って、日の光で宝石のように輝いていましたが、

もう空の色に溶け込んでわからなくなりました。

きっとあの小鳥は砂漠の上で力尽きて水になって砂にしみこむのでしょう。

そしてあの小鳥の水に生命を得て、また砂漠にヒマラヤ杉の芽が出るのでしょう。

しんと静まりかえった木を見上げて少したたずんでいますが、はるかにはまた歩き出しました。

もう行かなきゃと思ったのです。

少し歩いて振り返ると、あの小鳥の羽根のように透明で澄んだ空に大きなヒマラヤ杉の緑が映えていて、その右手にお日様が白く光っていました。

その光でヒマラヤ杉は砂の上に背の低い灰色の、影のヒマラヤ杉を作っていました。

その影を見てはるかには、また日が少し傾いたようだな、と感じました。

2時

はるかには線路のわきを歩いていました。

何度目かに振り返ったときに、

もうあの大きなヒマラヤ杉が地平線の向こうに消えていたからです。

ヒマラヤ杉が見えているうちは線路の上を歩いていたのですが、木が見えなくなると、歩きやすいレールから降りて砂の上を歩き始めました。

轢かれるのが怖かったからです。

そうやって歩いていると、今度はお腹が減ってきたなと感じました。

何か食べたいな、と思いました。

そうだな、例えばシュークリーム。

ひんやりとしたカスタードクリームが入った、ざっくりとした狐色の皮のシュークリーム。

それから、おさつパイ。黒ゴマがつぶつぶとついて、表面があめ色にてかっているさくさくのおさつパイ。

それから、クレープもいい。ふんわりとした生クリームがたっぷり入っていて、

甘酸っぱい苺を半分に切ったのがたくさん入ったクレープ。

はるかには食べたいと思うものを次々に想像していきました。砂漠を延々と歩いているのはひまなのです。

それから、フルーツあんみつ。冷たくて透明のさいころ型の寒天に甘い香りの黒蜜がかかって、

もちもちとした白玉と、あずきのたつぷり入ったフルーツあんみつ。

フルーツは、りんご、バナナ、キウイ、パイナップル、苺……。それから、ベーグルならシナモンがたくさんまぶしてあって、レーズンが入ってるベーグルに、クリームチーズがはさんであるの。

それから、アールグレイの紅茶の葉が細かく刻んであって生地に練りこんである

ざくざくの紅茶クッキーに、刻んだレモンの皮の入った生クリームをつけて、

熱いミルクティーと一緒に食べる。

はるかには、そんなことをいろいろ想像しながら歩いて行きました。

次々と浮かんでくるのを、誰もいないので声に出して数え上げていきました。

そうやって声に出してリズムをとって、元気に歩いて行きました。

ふと、はるかは口を閉じました。どこからか甘い匂いがするので、

さっきのヒマラヤ杉のように、またいいことがあるといいな、と思いました。

しかしその甘い匂いはだんだん強くなるのにつれて、食べ物ではなくて

花の匂いのように思えてきました。それはバラの花のような香りでした。

少し涼しげでもあり、うすピンクの透き通った花びらが思い浮かびました。

右斜め前の方から風が吹いてきているようで、

はるかの前髪と髪の間に入って髪を散らしていきます。

はるかの前髪も揺らしていきます。まつげにも触っていきます。

そして、はるかの全身がその涼やかで甘い香りに洗われていくようでした。

はるかの足どりは重くなりました。

そして、いつのまにか空気にもやがかかっていることに気づきました。

視界がうす花片色になっています。

はるかは目を伏し目がちにして足元を見ながら歩きました。ぼんやりとしています。

ふと、髪に何かついている気がしました。

頭を振ると、ひらひらととても薄くて、手のひらにのせると手のひらがすけて見えるような、

ほんの少しだけピンクのかかったハート型の花びらでした。

はるかが上を見上げると、青空だったはずのところに綿菓子のような雲がありました。

その雲はとても低くて、誰かに肩車してもらったら手が届きそうでした。

その雲から、ひらり、ひらりと少しずつ花びらが落ちてきているのでした。

はるかは自分の手のひらの中の花びらを顔に近づけました。すると、とてもいい匂いがしました。

口に入れると、その花びらは舌の上でシュツと溶けていきました。それはこの上もなく良い香りです。甘くて、少しチョコレートに似ていました。

そして飲み込むと、のどにほろ苦さが残りました。

はるかには憂鬱なような切ないような気持ちになって、花びらが降りかかってくる中をふらふらと歩いて行きました。そして、花びらが髪や服に降りかかっていたり、手で取れるところに降りてきたときは、それを取って口の中に入れました。するとそれは極上のチョコレートのようにふわっと香りたつのですが、すぐになくなってしまつのです。そしてのどに苦味が残ります。

はるかは少しいらいらしてきました。花びらはとてもおいしくて食べたいのに、ひらひらとゆっくり落ちて来るのもどかしいし、食べても食べた気にならないし、後味が苦いのです。すぐ次のが食べなくなるのです。

はるかは少しの間苛立ちをかみしめていましたが、髪に降りかかって来た花びらを振り落とすと、もやの中を走り出しました。

なんてうつとおしいもやなんだろう。前の方があまり見えません。はるかは苛立ちにまかせて、走りにくい砂の上をがしと走りました。

花びらがとてもとてもゆっくりと遠く近く降って来ているのが美しいので、何か恐ろしい夢でも見ているような気になって走り出しました。吸う空気の香りが強いのでむせそうになるのですが、仕方なく吸って、はいては、走りました。

気がついたのですが、初めもやがやってきたときの涼やかな匂いがすっかりきつくなっていて、甘ったるいくらいです。もやもとても濃くなっています。

はるかはいっそう怖くなって走りました。これは罫かも知れない。
怖い。怖い。

無我夢中で走っていると、突然パツともやから抜けました。
すがすがしい空気です。はるかは大きく深呼吸しました。
太陽は明るく白く照っていて、空は薄青くて高いのです。

カラリと晴れていました。ほっとして一安心して後ろを振り返る
と、

あの綿菓子のような雲がやっぱり花びらを降らせていました。
その光景を見て、はるこは懐かしいような切ないような気持ちに
なりました。

でもあんなうっとおしい匂いはもうたくさんです。

はるかは砂の上に腰を下ろして一息つきました。
そして、スカートのポケットがふくらんでいるのを不思議に思っ
て手を入れると、

中には香ばしくこんがり焼けたくるみパンが入っていました。
それはちつとも甘くはなかったけれど、
はるかは線路のわきに座ってそれをしっかりと噛しめながら食べ
ました。

それはお日様の明るい光の中で、とてもおいしくて、空腹だった
はるかは満足しました。

3時

日は明らかにまた傾いたようでした。この世界の仕組みがちよつと分かった気がしました。

自分の影もさつきより伸びていました。

影は右斜め前にあって、縦に押しつぶされたドワーフのように見えませんでした。

はるかには足を前に出すたびに、その影もよちよちと歩くのを見ながら歩きました。

そうやって影を見ながら歩いていると、影に話しかけたくなくてしまいました。

誰ともずつと口をきいていなかったからです。

でも、話し掛けても答えてくれないだろうから、我慢してそのまましばらく歩きました。

そうやって下を向いていたので気づかなかったのですが、ふと空気の流れを感じて前を見ると、

何かがざわめきながらこっちへ来るのが分かりました。

それは空中をもつれながらやってきました。目には確かに見えませんでした。肌で感じました。

それらは何かしゃべっていました。

「はやく、はやく、いそがなきや。」

「いそがなきや。」

「おこられちゃうよ。」

「よりみちしているとまたおこられちゃうよ。」

口々にそう言いながらやってきたのは風のようにでした。風の子どものようでした。

はるか顔に空気が吹き付けていて、それがだんだん強くなりました。

それははるかを見つけたようでした。

「おい、あれみろよ。」

「あ、おんなのこだ。」

「ほんとだ。めずらしいなあ。」

風の子どもたちは好奇心でいっぱい、ヒュー、ヒュー、とはるかの周りをぐるぐる回りました。

風の子どもが砂漠の砂を撒き散らすので、お日様の匂いが立ち昇りました。

はるかを中心とした小さな竜巻のようになっていました。はるかはちょっと嬉しくなりました。

「あなたたちは風の子どもの？」

とはるかが尋ねると、

「そっだよー。」

「そっだよー。」

と口々に言いました。はるかの周りを回っているので、その声は立体的に聞こえました。

「ここからどのくらい歩いたら駅に着くか分かる？」

と聞くと、

「そんなのかんたんだよ。」

「ゆうがたまであるけばつくよ。」

「ゆうがたになったら、もとのばしょにつくよ。」

と言います。そこではるかには安心しました。それから、やっと話
ができる相手を見つけたので、

この際いろいろ聞いてみようと思いました。

「ここはどこだか教えてくれる？」

そう聞くと、

「ここはきみのゆめのなかじゃないか。」

「きみのこころのなか。」

「きみのあたまのなか。」

「きみはゆめをみてるんだよ。」

はるかには、そうじゃないかとは思っていたものの確信が無かった
ので、

そう裏付けが得られて安心しました。

「じゃあ、目が覚めれば元の場所に戻るのね？」

そう聞くと、

「そうだね。」「めがさめればね。」

「もどらなきゃね。」

「めをさますためにもどらなきゃね。」

「ゆうがたにはもどらなきゃね。」

風の子どもたちはヒュウヒュウとはるかの周りを回りながら、声をかぶせるようにそう言うので、

「わざわざ線路をずっと歩いて戻らなくても、

夢が覚めれば元に戻るなら、私はここにじっと座って、目が覚めるのを待とうと思うんだけど。」

と言うので、

「それじゃあだめだよ。」「めがさめないよ。」

「いつまでたつてももどれないよ。」

「せんろをもどらなきゃ。」

「ねむってるきみをおこさななきゃいけないんだから。」

「きみがきみをおこさないかぎり、きみはずっとねむったままだよ。」

と風は言います。

「そうなの?」

と問うので、

「だってきみはゆうがたにねむったんじゃないか。」

「まちがっておひるにきちやったんじゃないか。」

「ゆうがたまであるいてもどらなきゃ。」

「きみはじかんのれっしやのりかえをまちがったんだよ。」

「ちがうよ。スイッチがまちがってはいってたから、

れっしやがはんたいほうこうにいつちやっただよ。」

そう風は話しています。互いに議論をはじめたので、はるかはそれをさえぎるように、

「歩いて戻らなきゃいけないの？列車は来ないの？」

そう聞くと、

「だって、むかしのことはおもいだせるけど、

みらいのことはおもいだせないだろ？だかられっしゅはかこほうこうにしかはしってないんだよ。」

「かこへいけばいくほど、れっしゅはかそくする。

ビュウーン。」

そう言った風の子どもは、速く飛んではるかの髪を巻き上げました。

はるかはこの世のものではないほどの速さの列車を思い出ししました。

「きみはおひるできがついたからまだよかったよ。

わるくするともっとまえまでもどっちやうからね。」

「あるいてもどってくるのはたいへんだよ。」

風の子どもたちはそう言つと、

「たいへんだ。」

「そうだった、よりみちしちゃだめなんだ。」

「いそがなきゃ。」

「いかなきゃいかなきゃ。」

と慌てはじめ、

「じゃあねー。」「がんばってね。」「ばいばい。」

と、行ってしまおうとしました。

はるか髪を吹き上げられながら、

「誰に怒られるのー？」

と叫んだら、

「ときのめがみさまだよー。」

と遠く返事が聞こえて、それから風のひゅうひゅうという声も消えて元どおりにしんとしました。

「時の女神さま？」

はるかは風の去った砂漠に一人で影と一緒に立っていました。

ふわふわ浮き上がっていた髪も、スカートも、元に戻りました。

はるかはもつれた髪を指でほぐし、砂を振り払うと、また歩きだしました。

でもはるかの心の中はまだかき乱されていて、なかなか元に戻りませんでした。

台風が散らかしていったように混乱していました。

そうして、黙々と歩きつづけて、どれくらいたったでしょうか。ふつつとため息をついて下を向くと、そこに影がいました。

「ねえ、どう思うっ？」

そう聞いても、影はじつと黙ってそこにいるだけでしたが、
はるかが新しいことを知った分、影はまた少し成長したように見
えました。

4時

はるかには歩いていましたが、なんだかかきみしさを感じていました。太陽はかなり傾いてきていて、夕方がせまっている気配を肌で感じます。

それでもまだ空はのん気に薄青く光っていました。

はるかの心には、早く帰りたい、というあせる気持ちが出てきていました。

そうやってあせる気持ちを抑えながら歩くのはつらいことでした。さつき風の子供たちに教えてもらって、戻って眠っている自分を起こせば

元の世界に帰れると知りましたが、知ってしまった分、早く、早く、とあせってしまうのです。

足の下はいつまでもざくざくとした砂でした。とても歩きにくいのです。

もどかしく、イライラしてきます。泣きたくなってきました。どうしてこんなにイライラしてしまうんだろう。と自分でも悲しくなってしまうほどです。

足を一步一步大きく持ち上げて、歩きました。足をとられる感覚は強くなっていきます。

半泣きでがつがつと歩いていくうちに、ひよっとしたら、と立ち止まりました。

砂漠にからかわれているのかもしれない。

はるかは、静かな静かな地平線をぐるっと見渡しました。

いや、空が私をおもしろがって笑ってるのかもしれない。

上を見上げました。雲一つない透き通った青空です。日が落ちた分だけ色が薄く、さみしくなっています。

しーんとして誰も何も言いません。はるかが疑いをかけたので、砂漠も空も息をつめてはるかをじっと見ています。

あんまり長いことしーんとしてるので、だんだん、世界が含み笑いをしているように思えてきました。

はるかはこの感じを知っていました。

髪の毛にいたずらで花を挿して、言っちゃ駄目だよ、しーっ、と言って、

こっちをちらちら見て笑っているのです。

何で笑ってるの？と聞いても、素知らぬ顔で答えてはくれません。そして、まだ気づかないよ、まだ気づかないよ、なんで気づかないんだろ？と笑っているのです。

はるかは、なんだか分からないけど、すごく嫌な気持ちになりました。

はるかは左手の太陽から顔をそむけるように、右を見ました。

そして自分の影の中を見ると、その手首あたりに何か落ちているのを見つけました。

濃い灰色に伸びた影の腕に、赤いものがあります。

身をかがめて拾ってみると、血のように真っ赤な二本の腕輪でした。

真っ赤なりボンに真っ赤な菱形のガラスビーズを通したものでした。

振ると、ビーズが触れ合ってジャラジャラと鳴りました。

誰の落とし物だろうか？と不思議に思つて顔を上げると、
今までは気づかなかつたのですが、地平線に向かつてまっすぐ目の前に赤い円が見えました。

周囲に何も比較するものがないので遠近感が狂つてしまつて、大きさがよく分からないのですが、
どうやら赤い服を着た人が集まつて円を作っているようです。
きつとこの腕輪の落とし主はあの中の一に違いない、とはるかは思いました。

はるかには線路を離れ、その砂漠に落ちた腕輪のような赤い人の円に近づいて行きました。

それは想像していたよりも少し遠くでした。
また、線路のわきは平らだったので、こうして線路を離れて砂漠を斜めに横切っていると、
砂漠が本当は緩い丘を持っていることを知りました。

薄い灰色の影をもつ丘を上つたり下りたりしながら近づいていきました。

近づくと、何か紙をびりびりと震わせたような音とざわざわした音が聞こえてきました。

もっと近づくと、それが歌で、女の人たちが手をつないで円くなって踊りながら

歌っているものだということがわかりました。

女の人たちはくるぶしまであるほど長い、赤いジャンパースカートをはいて、

長袖で袖口の広がった白いシャツを着ていました。

そのシャツの袖口や襟元には刺繍がしてありました。

そしてその両手首には、あの赤い腕輪をしていて、手を振るたび

にジャラジャラと鳴っていました。

はるかには圧倒されて、呆然とそれを見ながら、傍へ近づいていき
ました。

彼女たちは、まるで泉からこんこんと水が湧き出るようによどみ
ない足どりで、

つないだ手を振りながらぐるぐる円を描きます。

そして今度は手を離して、両手を自分の前に伸ばして、みんな円
の内側を向いて

右へ左へと揺れ動きます。まるで波のようです。

そして今度はまた手をつないで、みんなで円の真中へと押し寄せ、
波が返すようにまた外へ広がり、と繰り返した後、

手を離してその場でぐるりと一回転して、シャン、と腕輪を鳴ら
しました。

ぐるりと一回転するとき、真っ赤なスカートがわっと広がって、
下の白いペチコートが見えてとても綺麗です。

はるかはその一連の踊りが繰り返されるのを見ていました。

彼女たちは赤いスカーフを被って、金の髪飾り、金の首飾りをし
ていました。

耳飾りは腕輪と同じ、赤い菱形の石でした。彼女たちは合唱をし
ていました。

それを聞いていると、はるかはそのヒマラヤ杉のところにはいた小
鳥の歌が思い出されました。

でもこの歌はそれとは全然違って、行ったかと思うと戻って
くる、

戻ってきたかと思うと行っている、というように、

いつまでも終わりのない歌でした。

そういうふうに、高く上がって行って、また戻ってくる旋律と、

それはまるで、彼女たちの赤いスカーフの中からのぞく金色の髪が、

一筋一筋天から降り注いでいるようでした。

それはとても綺麗で、とても静かな光景でした。

ぼーっとそれに見とれていると、いつの間にか円がこちらへ移動してきて、

はるかですっぱり包み込んでしまいました。

まるでかごめかごめのように、はるかは円に取り込まれて、

周りを女の人たちがめぐっていきます。

少し怖くてどきっとしましたが、彼女たちは微笑みを浮かべて

はるかをからかっているような目で見ていたので、少し安心しました。

目の前を赤と金の光と、風景の一つのような歌が通過していきま

す。
それを眺めていましたが、ふと思い出して、線路の脇で拾った腕輪を自分の両手首にしてみました。

すると、ちょうど目の前の人が両脇に寄って、はるかのためにスペースを作ってくれました。

そこで、はるかはそこに入って、隣の人と手をつなぎました。

ずっと踊りを見ていたのでその簡単な踊りはすぐに踊れました。

前へ前へと進んでいって、次は手を自分の前でゆらゆらさせて、

また手をつないで今度は円の真ん中に向かって、また外側に戻ってきて、

手を離して一回転して、シャン、と腕輪を鳴らすのです。

はるかには踊っていても不思議な気持ちになりました。この人たちは何をしているんだろう？

どうして、こんなにずっとずっと踊り続けているんだろう？

はるかはいろいろと頭の中で思いましたが、だんだん何も思わなくなりました。

手をゆらゆらと動かすとまるで波のようでした。

よどみなく足を動かしていると、留まることを知らない水の流れのようでした。

はるかは周りの人と一体になって、自分が溶けてしまったように思いました。

歌は、耳鳴りのように、風景のように、当たり前そこにありました。

はるかは言葉が分からなかったけれど、口を開けて、何か歌おうとしました。

そのとき、はっと口をついて出た言葉が、

「雨が降る。」

それは確信めいたつぶやきでした。そのときちょうど、くると回って

シヤンと腕輪を鳴らしたときでした。

すると、そのシヤンという音を合図にしたかのように、ザ・ツとすごい音がして、

あたり一面暗く雨に包まれていました。

あんなに雲ひとつない空だったのに、はっと夢から覚めたように雲に覆われた青灰色の風景がはるかを包んでいました。

はるかは雨に打たれながら呆然としていました。

いつの間にか手首の腕輪はなくなっ

ページをめくったかのように周りの女の人たちは消えていました。前も後ろも左も右も、見渡す限り誰もいなくて、ただ雨ばかり降っていました。

ものすごい質量のある雨音でした。1 m先も10 m先も1 km先も、

同じようにザ・ツと雨が降っていました。

はるかは自分が一人ぼっちになってしまったので、思わず悲しくなっとうなだれてしまいました。そうしてなすすべもなく雨にうたれていました。

そうやってしばらくたって気持ちも落ち着いてくると、

あの人たちは雨を降らすために繰り返し歌って踊っていたんだということに気がつきました。

だから、良かったんだ、と思いました。

そう思うと気分が晴れて、すっかりしなきやと思いました。あの人たちの願いは叶ったんだ。

はるかはぬれた顔を手でぬぐいました。雨も小降りになり、ぼつり、ぼつりとしてきました。

私も私の願いを叶えよう、とはるかは思いました。

あの人たちはぐるぐる回って願いを叶えたけれど、私は線路をまっすぐ歩いて行って願いを叶えるんだ。

空はだんだんと晴れて、はるかが線路のわきに戻る頃には、線路の向こうにオレンジ色のきれいな夕日が見えていました。

「夕日だ・・・！」

はるかはその夕日を見て思い出しました。夕日に揺られて電車に乗っていて、

うとうととして夢を見たのです。ここがその夢の中なのです。はるかは自分を起こすために来た道に戻っているのです。

はるかは夕日を斜めに浴びながら。また歩き出しました。

雨で砂が固まって、足をとられることもなくなっていたので、一歩一歩しっかりと踏みしめながら歩いていきました。

5時

はるかには歩いていました。日が沈みかけているので、もう少しで帰れそうです。

でもなかなか駅にたどりつきません。

何かが起こらなければいくら歩いたって同じなんだ。何かが起こればいいのに。

はるかは周りに注意しながら歩いているのですが、変化は起きません。

地面は固くしっかりとされていて、ぐるりと見渡すと地平線で、そこをまっすぐ線路が貫いているばかりです。

小鳥も飛んでいないし、風も吹いていないし、雲もありません。地面にも何も落ちていないし、見渡しても何も見えません。

どうしたらいいんだろう。

ふと、風の子供たちが言った「時の女神様」のことを思いだしました。

その人はきつとこの世界を管理している人なのでしょう。

その人は、電車を走らせ、風を吹かせ、雨を降らせ、

この世界で起こるの全てのことをつかさどる神様なのでしょう。

はるかは歩きながら、考えました。

ここは私の心の中だから、その時の女神様というのは、私の心の

中の

一番透きとおった部分のことなのかもしれない。

はるかには立ち止まり、夕焼けの光で紫色に透きとおっている真上の空を見上げました。

でもそこはただただ透きとおっているばかりです。

どうすればいいのか分からなくて、途方にくれてしまいました。何も起こらないのです。

けれどもはるかは思い出しました。さっきの女の人たちが、歌って踊ることで、

雨を降らせたことを。何も起こらないのなら、私が何かをして、何かを起こせばいいんだ。

そう。線路を向こう側からこっち側に走って横切った時みたいに。

そこで、何をしようか、と考えました。歩きながら、とりあえず、願いごとを言ってみました。

「帰りたいんです。」

歩き続けながら、何度も言いました。

「帰りたいです。私は、帰りたいです。」

言ったたびに、確かになっていくようでした。

「帰りたいです。元の世界に帰りたいです。」

言ったたびに、それが本当のような気がしてきました。今までは、ただ元の場所へ戻ろうとしていただけで、本当に帰りたとは思っていなかったのかもしれない。

「眠っている私のところへ、帰りたいです。私は私を起こしに行きたいです。」

私のところへ、帰してください。」

だんだんと、元気が出てきました。そこで、もっと大きな声で叫びました。

「私は帰ります！今から帰ります！」

だんだん、歩いていたのが小走りになりました。

「私は帰りたいんです！帰ります！帰ります！」

言ったたびに胸の中で元気の種がぼん、ぼん、と音を立ててはじけていきました。

「私は帰る！帰るの！私は帰るの！」

ポンポンポン胸の中で種がはじけました。元気がむくむく出てきました。

元気が出てきたのがうれしくて、もっと叫びました。

「私、帰るんだからねー！」

そう宣言して、走り出しました。すると見渡す限り茶色の地面だったところに、

緑の芽がポンポンツと出てきて、走っていくはるかの周りでぐんぐん成長していきます。

はるかは嬉しくて、顔を赤くして走っていきます。

次々と芽が出ては、伸びていき、葉を茂らせた木になっていきました。

はるかとは線路を取り囲むようににょきにょきと伸びて、枝を生やし、

はるかはいつの間にか緑のトンネルの中を走っていました。

「私は帰る！」

勇気を出してレールの上に飛び乗って、電車のようにレールの上を走りました。

「帰る！」

と言い続けていました。走っていくはるかの両脇を、

すごいスピードで緑の木々が後ろへ流れ去っていきます。

緑のトンネルの中を、いつしか風のように走っていました。飛ぶように走っていました。

「私帰るよ」

家族の顔を思い浮かべながら、はるかはこの世のものではないスピードで走っていました。

すると、ぶわっと一瞬で緑のトンネルを抜けたかと思うと、まぶしい光の中に飛び込んでいました。

(え?)

はるか左を駅のホームがものすごいスピードで後ろへと流れ、はるかの右を駅のホームがものすごいスピードで”前”へと流れました。

駅のホームのベンチには赤いワンピースを着た女の子が静かに座っていて、

はるかに全く気づかない様子で、来ない電車を待っていました。

そのホームは桜の花びらでいっぱいになっていて、ふわり、とした風が吹いていました。

あれは私なのかな？

と、はるかは思いました。

そう思ったのも、そのホームが見えたのも、本当に一瞬のことでした。

はるかはものすごいスピードで走っていたので。

しかも左のホームははるかが走るのに合わせて後ろへと流れているのに、

右のホームは逆に前へと流れていたため、方向感覚を失ったはるかはずまずいてしまいました。

そして倒れる途中に、その女の子を見たのです。

その駅では時間がふうわりと流れているようでした。

はるかは後ろに流れていったホームを目で追いながら、倒れていききました。

再び日没

すると、ガクン、としてはるかにはっと目を開けました。

ガタンゴトンー ガタンゴトンー

気づくと自分は電車の中にいて、つり革を持って揺られています。

ガタンゴトンー ガタンゴトンー

目の前の窓の外を、夕日でオレンジ色に照らされたビルが流れています。

ガタンゴトンー ガタンゴトンー

次の駅が終点だと告げるアナウンスがありました。はるかの前
の座席に、

ランドセルを背負った女の子がうとうととしています。

その子の顔は夕日に照らされていて、ビルや電柱の影がいくつも
よぎっていきます。

はるかには、自分とまったく同じ姿をしたその子の肩をゆすりまし

た。

「はるか、降り遅れちゃだめだよ。もう着くよ。起きて。」

するとその女の子はゆっくり目を開けて、はるかの目を見返しました。

それは青く透き通った目でした。

起こす子をまちがえてしまったんだと思って、はるかは血の気が引きました。

はるかの背中側の窓の外では今、夕日が沈んだところでした。

「起こしてくれてありがとう。」

と、その子はとても透き通った笑顔を見せました。

その目から目が離せなくて、そのまままばたきをして、目を開くと、

その一瞬の間に入れ替わっていて、はるかは電車のシートに座って、

起こしてくれた人を見上げていました。

「終点よ。」

そう言って知らない女の人がつこりと笑って、ホームに降りていきました。

はるかも立ちあがって、駅のホームに降りました。

日が沈んだばかりでうす赤い光の中のホームは、人影もまばらでした。

はるかには頭がまだちよつとぼーっとしていましたが、人が自分を追い抜いて階段を降りていくのを見ているうちに、本当は家に帰りたくなかったことを思い出しました。

学校で嫌なことがあって、このままどこかへ行ってしまうたいと思いつながら

電車に乗ったのでした。

そうしたら本当に、とても変なところへ行ってしまったのでした。

はるかには砂漠にまつすぐ立った目印のように、しばらく突っ立っていました、

前ほど胸が痛くないことに気づいていました。

砂漠の中でも小鳥が水を運び続けてヒマラヤ杉が育っているように、

自分の心もまだまだ大丈夫だと思いました。ちゃんと自分の力で延々と歩いて帰ってきたのです。

私は大丈夫。はるかには景気づけにぴょんと一跳ねすると、

ランドセルをがちゃがちゃ鳴らして駆け出しました。

そして、帰る帰る、と思いつながら、線路の上を走ったのと同じ足どりで、

夕暮れの街を走って帰りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4512u/>

ある日の夕方に。

2011年6月30日23時10分発行